

長寿社会に生きる

秋山 弘子

世界最長寿国の日本では、20世紀後半に平均寿命の30年延長という驚異的な「寿命革命」を達成して、人生90年と言われる時代を迎えた。長寿社会に生まれた私たちの主要な課題は2つある。1つは90年の人生をいかに設計して生きるか、という個人に課せられた課題である。人生50年時代と90年時代の生き方は自ずと異なる。人生が倍近く長くなっただけでなく、人生を自ら設計する時代になった。20歳前後に就職、そして結婚、子どもの誕生と続き、定年退職、といった画一的な人生モデルは社会規範としての力を失い、多様な人生設計が可能になってきた。例えば、90年あれば全く異なる2つのキャリアをもつ二毛作人生は十分可能である。しかし、いまだ人生50年時代の価値観とライフスタイルで生きている。定年退職や子育て後の人生設計がなく、長くなった人生を持て余している人は多い。90年の人生を健康で、持てる能力を最大限に活用し、自分らしく生きることは、長寿社会に生まれた私たちに与えられた特典であり、チャレンジでもある。

もう1つは社会インフラの見直しという社会レベルの課題である。私たちが住んでいる「まち」や社会システムは、人口がピラミッド型をしていた時代に作られたままで、高齢者が人口の三分の一を占める超高齢社会では機能不全に陥るのは明らかである。建物や交通機関のようなハードのインフラのみならず、医療や雇用、教育制度などソフトなインフラも長寿社会に対応できるよう作り変えねばならない。例えば、一生に複数のキャリアをもつ多毛作人生の実現には、若年者に特化した教育制度や年功序列・終身雇用の雇用制度では対応できない。

長寿社会のこれら2つの課題を解決するためには、個人の長寿化と社会の高齢化に応じた新たな価値観の創造と社会システムの抜本的見直しが必要である。



PROFILE

あきやまひろこ：東京大学高齢社会総合研究機構特任教授。専門はジェロントロジー（老年学）。イリノイ大学でPh.D（心理学）取得。米国の国立老化研究機構フェロー、ミシガン大学社会科学総合研究所研究教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授等を経る。高齢者の心身の健康や経済、人間関係の加齢に伴う変化を20年にわたる全国高齢者調査で追跡研究。近年は超高齢社会のニーズに対応するまちづくりにも取り組む。